

地域サポート人材と農村におけるリジェネラティブ・トラベル

——^{かしももくしょうじゅく}加子母木匠塾の加子母地区への関わりから——

主事研究員 佐藤彩生

1 農村とリジェネラティブ・トラベル

コロナの蔓延以降、国内旅行に回復の兆しがみられる一方で、農村では旅行者の受入れに積極的に踏み出せない地域も少なくない。近年の国内外の観光政策においてはサステナブル・ツーリズムが重視されてきたが、次の段階として「リジェネラティブ・トラベル(regenerative travel)」にスポットが当てられつつある。これは再生可能な旅とも呼ばれ「その場所を以前より良くする観光」を指す(注1)。つまり、旅行者がある地域を訪れることで以前よりも環境・社会・経済面において何らかの恩恵がその地域にもたらされることを意味する。

そこで本稿では、農村における旅行者との関わりに着目し、有志の学生団体「^{かしももくしょうじゅく}加子母木匠塾」と岐阜県中津川市加子母地区を対象に農村におけるリジェネラティブ・トラベルの検討を行っていききたい。

2 加子母地区と加子母木匠塾

加子母地区(以下、加子母)は面積の9割を森林が占める農林業が盛んな中山間地域で、これまでに域学連携に積極的に取り組んできた(注2)。加子母で木造建築を学ぶ8大学(注3)の有志団体「加子母木匠塾」(以下、木匠塾)の活動は加子母の域学連携の取組みのひとつであり、2023年で29年目を迎える。

毎年夏季に各大学のチームが加子母に集い、地元の工務店からノコギリやカンナの使い方を学びながら、加子母の木材を使用して制作活動を行う。2019年までは例年、約300人の学生が加子母を訪れて2週間程度滞在し、NPO法人かしもむらが窓口となって地域住民と交流しながら、東屋や橋、家具、本棚やデ

ッキなどを制作してきた。過去の制作物の数は100を超え、加子母の住民の生活や風景に溶け込んでいる。

3 コロナ下での木匠塾の活動と地域住民との交流

コロナ蔓延に伴い活動を自粛せざるを得なかったが、2020年は加子母にある渡合キャンプ場の今後の活用 アイディアを募るコンペティションがオンラインで開催され、木匠塾OBの大学教授が審査員となって各大学が競い合った。また2021年には各大学で水車のパーツを設計・作成し、完成したパーツを各大学から運び込み加子母で組立を行った。

そして2022年夏季には、コロナ対策を万全に行った上でコロナ前のような合宿形式での制作活動を再開した。8月8日から8月20日までの期間に、週代わりで木匠塾の幹部以外の参加者で総入れ替えを行う形式とした。参加者は例年とは異なり、8大学の混合チームで編成され、延べ55名が参加し、連結すると円形になる8つの異なるデザインの木造ベンチを制作した。

ほとんどの学生にとっては加子母への来訪が初めてだったことから、木匠塾の活動の初日に学生が加子母の地域を知るための時間枠を確保した。具体的には、トウモロコシやトマトの収穫体験、地元の婦人グループとの^{ほお}朴葉寿司づくり体験、芝居小屋「明治座」や山守資料館の見学、マウンテンバイクツアー、乙女溪谷のハイキングなど、班によって異なる地域の観光コンテンツを楽しんだ(写真)。

また、学生が加子母森林組合から林業のレクチャーを受けたり、森林組合の職員や木工品の販売ショップの店員など地域住民との会



写真1 朴葉寿司づくり体験の様子(木匠塾提供)

話を楽しんだりし、例年以上に滞在中の地域との交流の機会を多く設け、地域住民との交流の環を広げた。

4 加子母歌舞伎での地域住民との共演

さらには3年ぶりの開催となる第48回加子母歌舞伎公演において、木匠塾の学生2名が役者として参加した。同公演は加子母歌舞伎保存会が主催する地歌舞伎で、役者はプロではなく、加子母歌舞伎保存会のメンバーと小中学生やその教員など地域住民が松本団女氏から振付の指導を受けて演技を行う。木匠塾の学生が参加するのは今回が初めてであった。公演中、木匠塾の学生が見得をする場面では「木匠塾！」と掛け声が飛び交い、場内が沸くなか見事に役を演じきった。また、映像制作を仕事にする木匠塾OBが、観光PR用に本公演の映像を撮影し記録に残すなど裏方をサポートした。加子母の伝統行事である歌舞伎公演に木匠塾の学生が共演することの意味は大きく、これまで以上に木匠塾と加子母の住民との関係を深める機会となった。

5 リジェネラティブ・トラベルと地域サポート人材

加子母は農林水産省の「農泊推進対策事業」における農泊地域のひとつであり、コロナ前は観光コンテンツづくりや体験提供に積極的に取り組んできたが(注4)、コロナによってマウンテンバイクツアーや収穫体験など一部の活動を縮小していた。しかし、2022年の木匠塾の受入れでそれらの体験を提供していることから、今後は加子母でコロナ前の観光の取組みに段階的に戻っていくことが期待できる。また、加子母歌舞伎への参加だけでなく、加子母森林組合の東京でのイベント出店や加子母での山の日のイベントのブースの手伝いなど、加子母の木工製品の販売やPR、地域内の行事の活動など様々なシーンで木匠塾の学生が呼ばれ、サポートに加わった。

このように木匠塾の学生は、地域で観光や交流を楽しむ旅行者と地域づくりのサポートを行う外部人材の2つの要素を兼ね備えた存在であり、学生が木造建築を学ぶという木匠塾の本来の目的以上の価値が学生と地域の双方に生まれていることがわかる。リジェネラティブ・トラベルの観点では、学生が地域に制作物を残していくことのみならず、地域住民との交流を深め地域づくりに加わることを通して、コロナ下においても再び観光・交流や行事等に携わる地域住民の士気を以前よりも高めるきっかけになったことの意義が大きいと考えられる。農村においては、このような地域サポート人材の存在が今後も重要であるとみられ、これが農村におけるリジェネラティブ・トラベルのひとつのかたちと言えるのではないだろうか。

<参考文献>

- ・小口広太(2020)「大学と地域の連携活動をめぐる現状と行政の役割に関する一考察：岐阜県中津川市「域学連携事業」を事例として」千葉商大論叢58巻2号、181～196頁
- ・佐藤彩生(2019)「農泊で美林を守る加子母森林組合」『農中総研情報』3月号、26～27頁
- ・村山慶輔(2020)「観光再生-サステナブルな地域をつくる28のキーワード」プレジデント社

(注1)村山(2020)、28～33頁。

(注2)中津川市の域内連携活動の学生の受入れのうち加子母地区の受入れは約7割にあたる(小口(2020))。

(注3)金沢工業大学、京都芸術大学、京都工芸繊維大学、京都大学、滋賀県立大学、東洋大学、名城大学、立命館大学。

(注4)佐藤(2019)参照。

(さとう さき)